
仮面ライダー 幻想郷～原点の風が幻想入り

本郷一刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー 幻想郷～原点の風が幻想入り

【NZコード】

N5414X

【作者名】

本郷一刀

【あらすじ】

かつて、世界の裏を操作していた秘密結社『ショッカー』を壊滅させた

4人の改造人間たち、そのショッカーの恐怖が『幻』となつた今、若きライダーの闘いが再び・・・

第壹話『再び駆け抜ける風』

少し前まで、「ショッカー」という組織と戦っていた戦士たち中で、唯一試作品の戦士^{プロトタイプ}がいた。その戦士は、他の3人の戦士とは別の道に進み、学生として暮らしている。しかし、そんな平和は、長くは続かない。平和にするまでは時間がかかるが、平和を壊すのは一瞬だ、その一瞬を彼はのんびりと過ごしたかつただけだった。それは人々の心からショッカーの恐怖が「幻」になっていた時のことだ。

やっと落ち着ける生活を送れるようになった、風見さんや本郷さんは教師として一般人の中に紛れ、一文字さんは各地に飛んでカメラマンとして活躍しているなか俺はただの学生として紛れ込んでいるが、落ち着かない。また何か起りそうな気がして仕方ない。

「北郷君、おはよ~」

「ああ、おはよ~」

とそつけなく返事してしまう。自分が嫌だが、あの日以来あんまり人とかかわりたくない、俺はもう、ホッパー^{プロトタイプ}にして改造されてしまったあの日からだ、まったく俺は、の人たちには追いつけない。

「ねえ・・・少し遊ばない?」

「へ?」

不意に背後から声をかけられ、振り向くが誰もいない。空耳かと思

い振り返ると、美しい女性が、目玉がたくさんある空間から上半身を出していたが周りは気付かない。というよりも周りの人がない。そして、俺までその目玉だけの空間に吸い込まれていた。

「ここはどこだ！ ショッカーの一員か！」

「いいえ、違うわ、むしろその逆、あなたの力が借りたいの」

「…………力を…………どういう事だ」

「貴方達が戦っていた敵がちょっとここに来ちゃって残虐を始めてね、私達でも手に負えないの」

その言葉で脳裏をよぎったのは、目の前で殺された家族の姿だった、そして同じ思いをしてる人がいるとすると怒りがこみ上げてきて、顔の傷が少し浮かび上がっていたらしく、相手は少し表情をえていた。

「分かった、だが相棒バイクも連れてけよ」

「解ってる」

意志の決定は思いのほかあっさりとしていた自分に驚きを隠せないでいる。だけど、迷いがない方が幸せかも知れない。脳改造をショッカーの面白半分でされなかつた俺にとつてはだけど・・・・・。

第3話『闘いは再び』

俺が目的地に着くとそこには、シードラゴンが人を殺そうとしていた。しかし、すでに何人か殺したらしくシードラゴンに血が付いていた。赤く鮮やかな血と黒く染まった血が、

そして、シードラゴンは転んだ子供を絞め殺そうと近づいてくる。子供は恐怖でその場で泣き始め逃げようにも足がすくんだらしく動けない。そこに蒼い服を着た女性が子供を抱きかかえるが、シードラゴンはすでにその背後について手の触手を伸ばそうとしていた。

「はああああ……」

「ぐ・・・貴様はホツパーー01！」

「久しぶりだな、ショックナーの怪人、さあ君はその頃連れて早く

「ああ、どこのだれか知らないが助かった。」

「礼はいらないよ・・・・さあ残りの2体も出てこいよ」

女性が遠くに行つたのを確認し、シードラゴンの残り2体を見つけて出す。

そして、徐々に俺の体が装甲で覆われ、ヘルメットの様に仮面を付け戦闘準備は終わり相手に向かつて走る。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あれ？ あの人かず君？ でも雰囲気違うけど、かず君だ、
なんで幻想郷に？ つて変身した！？ あれって確か仮面ライダー旧1
号？

ベルトも白いし、目も白いし、身体は黒いし、赤いマフラーだし、
あつ混乱してきたけどとりあえず避難誘導しないと！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

シードラゴン1、2を破壊した北郷ライダーはそのまま逃げようと
のまま相手の頭を砕き、その体をシードラゴン2にぶつけて、飛び
上がり相手にライダーパンチを浴びせる

「ライダーパンチ、一段返し」

シードラゴン1、2を破壊した北郷ライダーはそのまま逃げようと
する、シードラゴン3を捕まえ情報を聞くとサイクロンで轢き飛
ばし捕まる

「ああ貴様のボスはどうしている？」

「俺たちは、そんなことを貴様などに言つものか！」

「言いやがれ！」

「ふん、ヒントをやるが、怪人は俺たちを含め、10体だ、10体
だけでもここには征服できる！…」

と言い残したあと相手は爆発した。ショックカーは証拠を残さないた
めに怪人たちを爆破し、強い酸で溶かす。用済みの処分に関しては
徹底している。

「消えたか、あと7体の怪人か、スパイダー、バット、コブラ、スネーク後の3体は誰なんだ？」

と疑問を残しながらも変身した姿からいつも姿になり、あたりを見回すがショックカー戦闘員の姿すらなく、怪人単独の行動とみていらし。ただ久々の戦いのせいで、リジェクション（定期的に血液を交換しないと起こる拒絶反応）のような現象に見舞われる。

「具合はあまり良くないみたいね」

「半年のブランクがあるからね……でも心配されるほどでもないから大丈夫だよ……えっと名前は？」

「八雲紫よ貴方は北郷一刀、またの名をホッパー・プロトタイプ」

「いや今は仮面ライダーとして都市伝説になってるよ

「でどう？相手の人数は解った？」

「ああ、とりあえず後7体の怪人がいるってことだけ」

その後一刀は被害の確認を行つた。死者13人、負傷者30人と少ないような気がするが、この里にとつては大きい被害である。

「あのさあ～八雲さん俺の家はどこになるんですか？」

「あ～それならいいところがあるわ！」

と言われ、サイクロンごと「スキマ」と呼ばれる物を通り、目的地に着いたが何時もスキマにはあんなにも目玉があるのだろうか？気

にしづやいけない所かもね。

「到着へ」

「到着へ」

「貴方の知り合いがいる所なはずよ」

「知り合いつてかもうこんなに日が暮れて帰り大丈夫ですか？」

「心配してくれてうれしいけど大丈夫よ、きちんと先に連絡したから大丈夫だからいいなさい。」

「了解、ふう、失礼します」

「はへー」

「どうもハ雲さんからへーでお世話になれと……つてさなぢやんへー？」

「かずくんへー？」

「おや、一刀じゃないか」

「神奈子さんへー？」

と意外にも昔仲良くしていた親子？（一刀支点）がそこにいた。そして見たかつた微笑みが見れたことで今まで感じなかつた物を久々に感じた。がそれと同時にまた戦いの渦にみを通すこととなる意味でもある。

第参話『再会、幼馴染そして新たなる闘い』

束の間の平和といつほじでもないが、個人的に満足している。がしかし、何で思い出話

しかも恥ずかしいのばつか話すんですか！？

「いや～早苗が五歳のころ一人で、迷子になつた時、私を見つけて早苗は大泣きして、一刀はそのまま、早苗を泣かないようにしてくれたっけ」

「それは昔のことです」

「やつですよ・・・」

「でも中学のバレンタインの時なんかさあ、他の女から一刀を守つてねえ、自分の部屋に逃げ込んだときはひょりとひやひやしたけどね」

「あれは俺も驚きましたしちょっと・・・」

「ちよつといつて何かな？」

しまつたー墓穴掘つた！？さすがに神様に嘘言つのもまあこし、どうしたらつてかさなちやん頭からめつちや煙出でるよー？俺でもそんなことできないのに

「葛藤してゐね～相変わらずでよかつたけどね

「はい？」

「諏訪子悪いけど今ショート中な早苗を早苗の部屋に連れてって」

卷之三

さなちゃんを連れて諏訪子さんはこの部屋を出て行った。そして神奈子の顔はさっきまでの笑顔とはちがい真剣な表情になりこちらを見るそれに合わせて俺も真剣な顔にする

「でいつからそつなつちまたんだい？」

「貴女達が行方不明になつた日の次の日に貴女方を探しに神社のあつた場所から帰る途中でした。ショックカーに捕まり、その後このような体にされ、あいつ等の氣まぐれで、脳改造はされずに済んで、1号と共に脱出しました、その後は1号を抹殺しに来た2号、V3と共にショックカーの怪人軍団を壊滅させました。がまさか、こんな事になつているなんて」

「……」は幻となつたものが来る場所、それ故に善惡は問わないからね、ただ今回に関しては紫にも手が負えない状況になつちゃつただけさ

「それで俺をここに・・・・・つー?」

激しい痛みと共に吐血するような感覚が俺を襲った。今までに無いほど辺の辛さ、どつしてだ?なぜここに来てからこれが起るー···
···はつー?シードラゴンは囮か!?

あいつらに俺達ホッパーだけに作用する毒を仕込んでおいたのか！？

「大丈夫かい？」

「ええ、あいつら俺たちの誰かが来る」とは予想してたらしいです、毒を盛られました、すみません」

「毒ー? 知り合いになんでも医者がいるから、紹介するよ」

「いえ大丈夫です。並みの人間じゃないですし、これは俺達ホッパー殺害用の毒だと思います、それにさなちゃんには内緒にしてください。」

「ああ、早苗の事だ、お前を絶対に戦わせないだろ?。」

「ええそれと、早速敵が来たようです。」

「え?」

改造された俺には分かるこの音は・・・バイクしかもこのタイプだと、ショックカラー・ライダー軍団、数は4機、やれる!」

「神奈子さんは、隠れてください。俺がやりますー。」

「いやー今は私も出るよ」

「ならいいの防衛をおねがいします。俺の帰る家でもあるので」

と言つと顔の手術跡が浮き上がりついていたのを見ていなにに気付きそのまま、俺は変身し外で、ショックカラー・ライダーとの戦闘に映つた。

・・・

・・・・・

「ホッパーP-1を確認、コレヨリ、殲滅スル、行くぞ」

「「「・・・・」」

無言のままショッカーライダーたちは目の前の仮面ライダーにミサイルダーツを投げるが、すべて蹴り返されるまるで、ここを守ると言つてるかのような行動だった。

そして爆炎の中から現れるライダーに向かつてくるショッカーライダー達・・・・

第参話『再会、幼馴染そして新たなる闘い』（後書き）

次回、ショック・カラーライダーとの戦いを始めるライダーは連携攻撃に苦しむが、そこを助けたのは！？

第四話『弾幕炸裂！仕留めのライダーキック！』

目の前のライダーたちは4体……いや4人だな、敵の装備はダーツ爆弾か、だが確かにこいつらは6人1チームだ。一体何処に隠れていると俺が思っているとやつらの後方から出てきた、そいつらの口が開き炎を出してきた。

「…………丸焼きかよ、ごめんだね」

といふと相手の中に飛び込み両脇の2体に受け身を取りながら蹴りを決めて怯ませ、その後正面の4体に向かつて走り相手の腕を後ろに捻じ曲げ動きを封じたその直後、そのショックカーライダーもろとも俺に爆弾を投げてきたが俺はかろうじて回避に成功したもののショックカーライダーは見事に爆散した。

「お前ら昔からやつだよな。脳改造されなくて良かつたぜ」

「まだ間に合うぞホップバーー！」

「お前は結構喋れるようだな」

御互いパンチで相手を殴ろうとするが拳同士がぶつかる、プロトタイプの俺は2・8セカンドしかないが相手は3セカンド、正直フレームが悲鳴を上げてるが俺はそのまま相手の空いた右腹に浴びせ蹴りを決めて、その場から離脱するが、相手は両サイドから攻めてきて防御するが正面がガラ空きになってしまい相手のキックを受けて弾き飛び、膝をついてしまう。

「これで終わりだ……ウグオ！？」

「！？・・・・・何だ今のが？」

「・・・・・どうだい？これがこっちの喧嘩の仕方「弾幕」こいつ」さ

「無理しちゃダメですかずくん！」

「相変わらずむちやするね。でもこの土地は私たちの思い出があるんでね、被害が少ないうちに終わらせようよ」

振り返ると3人の人間・・・・いや2人の神様と1人の人間が「弾幕」を撃ちショックカーライダーを倒した。これで戦いは楽になると判断した一刀は立ち上がり、風の力を借りたようにそこに立ちそして風がベルトの風車を回し力を与えてくれ、さっきまで身体を襲っていた痛みを取り除いてくれた。残る敵4体はそのまま走つてくるが、一刀は天高く飛び上がり、中央の敵を捕らえ

「ライダー・・・・・キック！！」

「ウゴオオ・・・・」

地面には身体を貫かれたショックカーライダーは、そのまま活動を停止してその場に倒れむ。残りの3体はすでに弾幕によりベルト部分を破壊され、弱つていた。

そして、一刀はきりもみシユートを使い3体を粉々にして戦いを終え、変身を解き

3の方に向かって行つた

「・・・・・ありがとうございました。」

「どういたしまして、向つだと他のライダーがいたと思つたが、ちでは私たちがチームだよ。」

「おっ、さすが恋する乙女!」

「さすが幼馴染!」

「一人とも茶化さないでください!」

本郷さん、一文字さん、風見さん、この3人のチームが早速出来ました。3人は1人で戦う重圧に気付いてくれたのかは、解りませんが、仲間ができるって嬉しいことです、同時に辛い事なんですね。

「ああ、寝ようか」

「奇襲があつたら……」

「大丈夫、起こすし、気付くよ」

と笑顔で言つてくれる神奈子さんの言葉に甘え、疲れを取るため睡眠をとることにした。

こうして俺の長い一日が終わると思っていたが、まさか寝室がさなちゃんと相部屋だとは緊張したけど疲れていて、そのまま寝た。けどなぜか朝起きるとさなちゃんがすぐ横で俺の腹を抱きしめて寝ていたため、動けなかつたのはまた別の話

第五話『ライダーキックが効かない？鉄壁の怪人登場』

あの日以来ショッカーの動きは無く、5日が過ぎていた。あまりにも静かすぎだ。

神奈子さんは天狗や妖怪たちから情報を集めてくれたが、まさか本当に妖怪たちがいるなんて、そういうやさなちゃんが言つてたっけ？「この幻想郷では常識に囚われてはいけない」って、苦労したんだなあ・・・

「おっ、どうだつた？ 射命丸さん？」

「あやや、気付かれましたか、しかしながらショッカーの情報及び隠れ家は見つかりませんでした。」

「そつか、ありがとうございます。」

「で、取材は受けてくれるんですね、ね！」

「は、はい・・・・（剣幕すげえさすが取材陣・・・・じゃなくて記者さん）」

その後取材を1・2時間答えた、後諏訪子の手伝いとして神社の屋根を直していた。がそこへ、また客人がやってきた。

魔法使い？魔法少女？どっちだこの女の子は？やべえ、さすが幻想郷ぶつちざるなあ

「よつーあんたが噂の仮面ライダーか？」

「ああ、そつだけど着地するなら地上にしてくれないか? ここに直しひばつかりだからさ」

「あいよ。」

聞き分けのいい子だ、さなちゃんの昔のじる原たいだな、元気あるし聞き分けいいし

「つい思い出にひたらずこ、とつい。」

すちやと音が立つたがまあ敵はいないんだし気にしない。 . . . 気にしたといふか居やがつた!

「さなちゃん離れて……。」

「はい? きやつ? 」

と真上をかすねたのは虹色の光でスパイダーは飛んで行つたがしかし!

「家壊すな! ! でもサンキューライクロン! !

サイクロンはスパイダーをこちらの足元まで弾き飛ばし、一刀はそのまま相手をつかみ神社から離れた所で戦いを始めた。

「お前が来たつてことは、他にも怪人が」

「ああ、俺たちは一人一人ではかなわないが二人ならどうだホツパ

IP1

「あぶねえーー？」

「シザーズジャガー外すな」

「次はしとめる」

「いやな組み合わせだな（ジャガーは最後にしたとしても倒せるか？）」

俺の居た世界ではシザーズジャガー相手に本郷さん、一文字さんのタッグで何とか倒せたようなもの、俺一人で今の状況を何とかできるか？いや、何とかするんだ！！

「ハアツ！テエヤアーー！」

パンチとチョップをスパイダーに当て、ジャガーに蹴りを浴びせていると上空から岩のような塊が降ってきた。

「何だーー？」

「シザーズジャガー、スパイダー貴様らは、總統が呼んでいる。」

「このダンゴムシがー！」

「までスパイダーーー旦引くぞ」

「ああ」

「なんだ？ダンゴムシールド？」

「なんでわかつたし」

「いや～明らかに盾付けてるし……」

「まあいいだろ？俺がここで作られた怪人、1番目だ！」

「ぐはっ！？」

何だこいつのタックル！？体中のフレームが痛むぜなんてカッコつけてる場合じゃねえ、堅い故に強か！まるでボールのよつに弾かれ、地面を滑空し、岩に身体が当たる。

「・・・・・ッウ、今度は・・・・・」しつちの番だぜ！、ライダー！パ

ンチ！！」

「その程度かホツパーP1？」

「なつ！？確かに決まつたはず！」

「貴様のスペックは俺より下だ、時代遅れの失敗作が

「ライダー・キックが通用しない！？」

キックもパンチも効かない相手に一刀は、立ち向かう術を考えながらも敵の攻撃を回避していた。

（あの両手の盾さえなければ……いや、盾があつても行けるけど八雲さんの力が必要だ……どうする？俺？）

と考えていた矢先、相手はチーンアレイを出しそれを使って攻撃

していくのをかわしたと思っていたが鎖が腕に巻き付き、地面に叩きつけられる。がその鎖は切られ、怪人も弾幕を浴びて後退する。

「つう・・・今のは客人のか?」

「客人じゃなくて普通の魔法使い、霧雨魔理沙さ

「かずくん大丈夫!?」

「何とかな、悪いが八雲さんの力を借りたいから連れてきてくれないか?出来るだけ早く」

「人使いの荒い奴だぜ」

「解りました、魔理沙さんよろしくお願ひします。」

「えつ、ちょ、もう決定かよ、解つたよひつと待つてな

「ああ、何とかする。さなちゃん弾幕で牽制しておいて!」

「でも動ける明らかに仮面取れかかってるけど」

「平氣丸(しかし、まだパワーがうまくまとまらねえ)」

八雲宅のふすまから漏れてくる声を魔理沙は聞いていた。それは一刀にかかることだった。

「なあ、それは本当なのか?」

「ええ、悔しいけど彼を元々は幼馴染に会わせるためだけだったけ

「でも、なんていつたけ? リジュクション? は起きてないけど」「彼の場合は、例えるなら蚊が血を吸うようなものよ」「つまり、気付かないうちに蝕まれてるってこと?」「ええ、彼の場所すでにチャージが遅くなりつつあるはず」

第六話「奇跡の合体キックで敵を倒せ!」

あいつ飛び道具まであるのかー やばいあのままだとなちやんに当たる、

咄嗟に飛びだし、早苗の盾となつた一刀ライダーは身体に銃弾を浴びるがその強化された装甲は簡単に銃弾を通さなかつた。

「…………かず…………くん…………」

「平気さ、元の状態でもこれぐらいはね」

とは言つたものの、明らかに赤い液体が流れている。それはまだ弾幕ごつこにしか慣れてない女の子にとつては、恐怖を与えるものですでに足が震え始めている。それを見たライダーは今、自分がどんなことをしているのか解つた。

（俺、バカじゃないのか、なんでこんな怖い思いさせる事を平然とやつちまつたんだ。何時もなら追い返したはずなのに。あの日決めたじやないか、戦うのは俺達4人だけでいいって、なのに俺はまきこんじまつたのか！？）

それは一刀、本郷猛、一文字隼人、風見志郎の4人がショッカーとの最後の決戦の1日前、最終決戦に俺達も連れつてくれとだが本郷は「俺達の戦いにもう人間をまきこみたくないんだ」といい、その後4人で戦いその中で結城丈一と出会い、彼が4番目のライダーとなり一刀は戦線を離脱したそれはもちろん、副作用のためである。

「…………さなちやんは下がつて、もう一人で大丈夫」

「カツ」「つけちやつて、もう呼ばれたから来たわよ」

「八雲さん！」

「紫さん！」

サイクロンで怪人を弾き飛ばし、紫に一刀は作戦を伝え、その10秒後作戦を実行した。

まず、早苗と神奈子、魔理沙の弾幕で相手の動きを押さえている間に、一刀ライダーが相手に向かつて最大エネルギーでのキックを放つために接近しながら紫のスキマにキックの狙いを定めて飛び込みそのスキマの行き先である相手の腹つまり装甲の無い部分に、

「ぐわああ・・・・貴様！」

「わざかな隙間を攻撃しただけだ！さなちゃん行くよー。」

「任せて！」

「奇跡』』』ラクルフルーツ』』

「『名付けてライダー』』ラクルシユート！』』

弾幕を身体に纏わせた二人は光の弾となり、相手を貫き相手は光の粒子となつて元の改造される前の姿になり、その後医者に念のために見てもらうこととなつた。

その後、早苗と一緒に人里に向かつこととなつた一刀だが・・・

「あの、さなちゃんちよつと歩きづらー。」

「だつて久しづりなんだもん」

つたくなんでこんなに可愛くなつたんだ！そして上田使いやめい！あ～あ、神を恨むのはよくないと聞くが今回は神奈子さん、諏訪子さん覚えておいてください！でもかわいいさなぢやん見れたらし、いかな？

「どうしたの？」

「いや、別になんでもないぞなんでもないからな」

「ああ、お買い物しましょうか」

「やうだな、荷物持ちは任せな」

「そのつもつです。」

「ですよねー」

その後買い物を続ける俺達だったがこここの通貨つて円じゃないんだ、どうしよう・・・

「あべへー・」

不意に頭にボール？蹴鞠？が当たり少しようけるが今の発言は雑魚が死ぬときに履くようなセリフだったよね

「大丈夫？」

「ああ、平氣さ」

「『めんなさい、ほらチルノちゃんも謝つてー。』

「あたいは悪くないもんー。」

「大丈夫だから頭上げな、今度から『気を付ければいいんだから』や。」

「つて貴方達またいたずら?」

「知り合つて?」

「まあやつこつ感じかな?」

「早苗さんの彼氏ですか?」

「・・・・・／＼／＼

「さなぢやん? 顔赤いよ」

「ホワアアアー! ?」

「じんじの司令官じゃないんだしさそんな声上げない、お兄さんとの約束だぞ

まったく、確かによく考えると答えずらいなー如いて言つなら恋人未満友達以上?

「やつこつ事にじといてくれ、まあ幼馴染なんだけどね」

「今のは告白として受け取つていいよね」

「復活はやつ…つて近い近い…」

「いいんですね?」

「ああ、別にいいけど買い物途中だろ戻りつぜ」

今日の教訓、幼馴染だからと言つて、告白のチヨイ前な事を言わな
い言つなら二人きりの時にしよう。

「ええ、じゃ失礼しますね」

「ああ、今度は人に当てんじゃねーぞ」

と言い残すと俺たちはまた買い物を続けた。が終始嬉しそうな隣の
少女を見ると、今までずっと戦つてきたことを忘れてしまいそうな
感じがした。

戦い終わつたらここに住もうかな?つて待ていー今~~の~~死亡フラグじ
やねーか落ち着け!

俺は死亡フラグを捻じ曲げる男になれ!

「どうしたの難しい顔して?」

「いや、もつといい言葉があつたかもしれない(死亡フラグを避け
た言葉のこと)」

「え、ええ!?(告白の事を想像中)」

その後守矢神社に帰宅した彼らは少し拳動不審だったらしいがそれ
はまた別の話になつて

第六話「奇跡の合体キックで敵を倒せ!」（後書き）

スーパーヒーローMAX!!!!

「今回の合わせ技決まったねーさすが幼馴染パワー?」

「ああ、さなちやんがうまく合わせたからかな?」

「ありがとー!でも神奈子様や諏訪子様との合体技は何なんだろう?」

「多分、神奈子さんとだと御柱から放たれた弾幕と共に敵に向かって爆発?」

「諏訪子様とだと地下からゾーンーって感じかな?」

「でも紫さんとの合わせ技はある意味チートだよチート」

「チート?」

「おわー!しきなりってか人の腹から出でこないでください!」

「いや偶然被つただけよ~」

「ならいいんですけど何なんですかちやんチャージしてるので?」

「いえ、なんでもないですよ?」

「なんかいつも来てるナビ、次回もお楽しみにー。」

第七話「不安と敵の目的」

質問攻め怖い、マジで怖い。

「ねえねえ、早苗に甘口でもしたの？」

「い、一体なんのことですか！？」

「いや～酒飲んだ早苗からのカミングアウト」

「下戸の人に何してんですか！？」

「いや、自滅だつたんだよ。水と間違えて私の酒を飲んじまって

「つあるー」

「それって遊園地の人？」

「いや、国際のなんか」

「御」一人さん、その組織は違うとこで頑張つてると思こます。」

「所でさあ、変身ポーズとか無いの？」

「え？ そうですね。再度改造手術した時に頼みます。」

「ならいい医者と」

「いい技術者がいるよ」

がしつと肩を2大神様に掴まれ身動きが取れない一刀は恐る恐る尋ねた

「那人達って改造手術できます?」

「おや?乗る気だね、どうしたんだい?」

「・・・・せなちゃんたちの力を借りずに戦いたい、でも今のままでしゃ、力も雑魚と同等いやそれ以下かも知れない。だから少しでも強くなつて皆を速く笑顔にさせたい。そして、ここで笑顔の皆と和平に過ごしたいんです。」

「さうかい、解ったよ。」

意外とすんなりだつたと思ひきや

「明日の朝は赤飯だね」

「さうだね、今軽くここで暮らすつて言つたからね」

「うああ~、やつちまつた。」

と自分で言つたことを思い出し恥ずかしくなり顔を赤くしたすぐ後だ、本当に10秒程度

後ろから柔らかい感触と衝撃が身体を伝わり振り向くと完全にできあがつた。早苗が背中に抱きついていた。

「かずくん~結婚してください~!」

「け、結婚…? は、話が飛び出す…。」

「えへへへ」

「くすぐったいって神奈子さん、さなちやんを部屋まで連れていきましたよひしく」

「えつ食べるもの?」

「いやいや、なんでそういうの…」

「いや年頃の一人です」

「ねえ~」

「勝てるきしねー」

「何せ神ですから」

「(1) もつともです。」

とその後はきちんと血塗りで寝たけども、その技術者と医者に会ったくなつた。

そうすればこの痛みも楽になると思つ。

そう右手を見ながら一刀は思った。すでにリジエクションでの吐血のような感覚は、本當になつつある。もしも吐血や激痛が戦闘中に起つたら、と考へると不安でしょつがない。明日、会こに行くことにしよう。

・・・・・・・・・・・・

「首領閣下、改造人間たちをどうするおつもりで？」

「いつその事すべてを混ぜ合わせ、最強の怪人を作りその怪人一体でこの地を征服してやるのだ」

「聞いたかシザーズジャガー、スパイダー、コブラ、スネークその装置に入れ・・・グフツ！？なぜですか首領！？」

「こやつらは脳が足りんでな貴様のその悪知恵の働く脳みそが必要なのだよ・・・シヨツカ－研究員たちよ早くしろ！」

「イー」

とその5体の死体を装置の中に入れ、一度は溶かし、もう一度型に入れ機械のボディを得た怪物を作り出した。その身体は蛇のようにしなやかに動き、その腕は岩をチーズの様に切り裂く刃が禍々しく光り、まるでクモのような俊敏さを兼ねそろえた怪人となつた。

「・・・・・・・・・さあホッパーP1いや仮面ライダーよ、こいつに無残に殺されるがいい！」

高く夜を照らす光に向かつて叫ぶ首領はその真の姿を現した。

「幻想郷は貰つた！」

それは壊滅状態のショツカーを大組織として復活させるための計画の第一歩の始まりだつた。

第七話「不安と敵の目的」（後書き）

スーパーヒーロータイムーー

「なんか！パワーアップフラグだね！」

「おわお！？隣で大声出さない！さなちゃん！」

「（）めんなさい、でもかずくんにロケットブースター やバルカンが装備されるのかな？」

「はー？それはロボットですよ、一応俺人間だよ？」

「せうだよ早苗諦めらな

「・・・・・はい、でも非想天則に取り付ければいいんですね！神奈子様！」

「うわお～早いなあ～さなちゃん

「まつ次回もお楽しみになー！ブラウン管の前の諸君」

「すいませんがモニターの前ですよ・・・」

「神祭『エクスパンデッド・オンバシリ』ー！」

「ギャアーーーー！」

第八話「合成怪人と再改造」

次の日の朝早く、俺とさなちゃんはその永遠亭といつ場所を目指して移動していた。

だが俺は地面を蹴り木々を蹴りさなちゃんの飛行スピードに合わせていた。

「つと、なあこのままでいいのか？」

「一応、私は場所わかつてゐるもん」

「了解」

いくら改造人間とはいへ、竹を蹴つて移動するのはなれないといつか竹がしなつてパワーが發揮できない。

そう思つていた矢先だつた。何かの気配を感じ振り返ると元の生物が解らないほど混ぜ合わつた怪物がそこにいた。咄嗟に幼馴染にこの事を報告しようとしたが、そのままタックルを喰らい地面に叩きつけられ、ボールのように跳ねて地にめり込む

「なんだ?」こいつのパワーは…」

「・・・・・・・・・・・・」

「つち改造のやり過ぎで、喋らなくなつたか!」

「・・・・・・・・・・・・」

「まじかよ・・・・・」

相手の尻尾が一刀の脇腹に当たり竹を折りながら地面に叩きつけられてしまつ。

そのパワーは今まで相手にしてきたものよりも上回つていて、いや比べ物にならないほどだつた。

「・・・・・変身しといて助かつたかな?」

変身した御陰でダメージは軽減できたが、仮面は鱗割れ、ボディにも鱗が入りこれ以上のダメージは、命にかかわつてくる。

「・・・・・こんなに身体に響くのかよ」

ライダーの姿で相手に殴りかかるが、相手はいつも簡単に回避し反撃を加えると赤い鮮血が流れ出し、緑の竹を赤く塗る。

「ぐふつ!?

「・・・・・・・」

「・・・・・恐ろしい者作つてくれたね。」

右わき腹からまだ紅く血が流れ続けていた、その血液は改造人間用の血液で、この地では決して手に入らないもの、普段なら止血システムが発動するが相手はこちらの設計図を記憶したのだろう。止血システムある場所を正確に攻撃してきたのだから間違いない。

「・・・・・一氣に行かせてもらひぜー」

早苗が近くにいないことを確認するときりもみシューートを決め、相手を空中に上げ、身動きを封じたと思っていたら背中の翼で空中から見下していた。

「…………羽あるのかよ…………全般的に不利に変わりないか・

・・・つ・・・？」

やばい、リジェクションが起きた、しかも激しい方のものだった、ただでさえ状況が悪いのにこんなのがて、死神にまでもかよ！人気者は辛いな・・・

「…………つふ、そんなこと言つてらんないね」

「…………と重い身体をあげて、空に浮かぶ敵を確認し、ライダー・キックを放つが相手の腕が鋭い刃物に変わり腹を斬り裂かれ、仮面が宙を舞い素顔を出してしまつライダー

「つ・・・お…………技が潰される。」

が相手の右目を引き抜いたライダーは痛みに苦しむ怪人の収縮自在な尻尾に捕まり地面を引き摺られ、肩のプロテクターが削り落される。その後立ち上がるが、身体はすでにリジェクションで蝕まれ、身体は、所々肉と配線が見えており、赤黒く流れる血液は、その白いベルトを汚す。

「蛇符『神代大蛇』！」

神の化身の蛇の如くその弾幕は相手を襲い退散させることに成功したが、元々の聞く席されたダメージが限界を達していたのだろう。まだ余裕を見せながらの退散だった。

「かづく・・・」

「大丈夫だそれより悪いけど多分河童さんたちの力も必要になるから連れてきてくれるか？」

「わ、わかった」

「さあて、もうこっちは本氣出すか！」

もう本氣などなく、限界寸前の彼は、ただ気合いで乗り越えようとしていた、それが機械の身体を破壊することと知っていても。

「おりやあああ！！」

「・・・・・・グウ！？」

「てめえの相手はこの俺、仮面ライダー旧1号だ！…あいつには攻撃させねえ！」

と叫ぶ一刀はそのぼろぼろの身体で相手と戦うために歩きだし相手の背中に飛び乗り羽を？ぐ、あまりの激痛に苦しむ怪人とその返り血を浴びて、顔を赤黒く染め、その瞳にはアイコンや、メーターが映し出される。それは彼にとって初めての経験、そのアイコンは自分のダメージが映し出されるもの、メーターは残りの活動時間というより、コミッターの制限時間だその時間中はすべてのスペックを何倍にもすることができるが、その時間を過ぎるとコジョクション以上の反動が襲う。諸刃の剣だ。

「まだまだ！…（あと1分半か！）」

「…………貴様は、もうバーサークシステムを使ったのか？」

「「」の声は…」

「さあ殺れ！キメラ！」

「…………グワアアアアアア…！」

「うわっ…？」

怪物は地面をはいながら尻尾でライダーを弾き貫かれ、そして地面にまた叩きつけられる。

そして活動時間が終わり激しく苦しみだす。だが相手の動きが止まりかける。

「「」はあ…？…動きが止まつた？」

「…………まったく、五月蠅くて診察もうひくに出来やしないわ、それにもつたく怪我人までいるの…？」

「…………貴女が八意 永琳さんですか？」

そこには蒼と赤のツートンカラーをした銀色の髪をした女性が弓矢を持って立っていた。

そしてその女性はゆっくり落ち着いた様子で答えた

「ええ、貴女の事は神奈子から聞いてるわ…立てる？」

「はい、立てます。」

と晒つが少しよけらるも肩に何かが支えてくれるのを感じた。

「わなわなやん?」

「わわ無理し過ぎ」

「ああ、すこませんが診察お願ひします。」

「はあ、一応予約があつたけどこんなにぼろぼろだとはね」

「はははは、すこません」

その後一刀は生体ポットの様な物に入り、河童および薬師による再改造並びに肉体再生をしてもらつこととなつたが

「うわおー、すげー構造だけど意外と無理やり入れてる感じだね。ならここのをいじつて」

「あのー、わざから何してんですか?」「とつせん?」

早苗は蒼い髪のツインテールの女子に話しかける。その女性が幻想郷のHONZIE-アとしても名高い、『河城にとり』だ

「うん?配線の修正と無駄を省いてるとこだよ」

設計図じきものを見ているがはつきり言つと解らないものだ、だがERRORと表示されている部分を修復してのだけは解つたそのすぐ後、『ERROR』の表示は消えCOMPLETEといふ表示に変わった。

「おお、これで彼の身体の修理と改修は終わったよ」

「これでリジンクションは起きないんですねー。」

「やうだよ。よかつたね彼氏さんが無事で

「か、彼氏ってそんなん」

「とまあえず次は私の番ね」

「あとは頼むよ、先生」

「まかせなさい、つて言つてもこの薬の投与で終わりだけね」

とこうと薬の入った無針型の薬を注射し、彼は目覚めた

「いたあ、ゴボゴボゴボオー！」

生体ポットとはいえ中身は液体、そりや、溺れるよ・・・・
こんなこともあつたが、カラーリングも少し変った力の戦士が復活
し、再度合成怪人との戦いに臨むのであつた。

第八話「合成怪人と再改造」（後書き）

スーパーヒーロータイム

一刀「次回は俺の復活祭だぜ！」

早苗「スイッチ着く？」

一刀「それは今のライダーでしょ？」

神奈子「あれ？ カードの奴は？」

諏訪子「カードじゃなくてメモリだよ」

一刀&早苗「それ2・3個前です・・・」

諏訪子&神奈子「な、なんだって～！」

一刀「そろそろ時間が～質問やコラボしたいですって方は気軽に感想、およびメッセージでよらせください。では」

早苗「次回をお楽しみに！」

第九話「再戦、合成怪人VS新ライダー」

いつもの仮面とは少し色が違い少し明るくなり、ベルトは汚れのない純白の色でマフラーもいつもと同じで赤いが身体の色が少し明るくなっている。これが仮面ライダー旧1号ではなく1号のような力ラーリングになっている。

「かずくん、大丈夫？」

「ああ、大丈夫さ悪いけどさなちゃんはここで防衛に専念してくれると嬉しいな」

「了解！」

なぜか嬉しそうに答える早苗をその場に残し一刀は、仮面を被りそのままさつきの怪人を倒すべくバイクに跨りそのまま向かう。そのバイクはいつもよりまして元気良くなつたモンスター・マシンである。相手は封印を解き暴れ始めようとしていたのをバイクで攻撃する

「サイクロンアタック！！」

「・・・・・・・グフッ！？」

「今度はこっちが凹ス番だぜ！」

と言つとバイクから飛び降りそのままライダー岩碎パンチを加え、相手の堅い腕の鍔を碎き、そのまま突進を加える。

「はあああああ！」

相手の腹に蹴りを加えながらのサマーソルトで相手の強化外装は徐々にはがれ、肉体が姿を現す。その部分に攻撃を加え始める。

「はあああ！」

「…………ライダー…………スケテ・レ」

「何だとー！」

「…………仮面ライダー俺達を…………助けてくれ」

「…………解ったが俺は魂しか救えねないぞーそれでもいいか？」

「…………」

相手は静かに首を縦に振った。キメラの元になつた人達の人格が奇跡的に復活し、その体を乗つ取り動きを止めていた。

「とうひーーーライダー…………キック！」

高く飛び上がつた戦士のキックはその悲しい怪物を光に変え、天に昇らせる成功したが、その心には首領に対する恨みが募つていた。

「あの野郎、今度こそ絶対倒してやるー復活させないほどこー！」

と空に向かつて叫ぶライダーは変身を解きさうに空に向かつて指をさし

「首領聞いてこらのならー今度こそ俺がお前をー倒すー復活できないほどになー！」

と言ひその場から立ち去つ、その場には一輪の花が添えてあつた。

「おーさすがに、性能が強化されてるよね」

「はーーーその面は大丈夫ですか」

なんでお前がいってんだよしかも（^▽^）ちつて感じの顔しちゃつてさあ、昔からロボットとか好きだったのは覚えてるよ、でもそこまでテンションあがるか？

「確かに色も変わってるねー前より明るいし」

「ありがとうござります。」

「ああてー飯にでもするか」

「そうですね手伝いますー」

「じゃ魚を手刀でさばいてー

「セーで使うんですか？ いきなり？」

「駄目ですよ、粉々になります」

「ええーそこまで強力じゃないし」

「つてか一人揃つて寝ちゃいねよ」

「だから…なんでそうなるの…」

最近の落ちはこれかかれこれ2回目の様な気がしてきた。がまあとりあえずバイクともども再改造され、新たな力を手に入れたライダーだった。

「ねえこの技の事は言わなくてよかつたの?」

「・・・ライダー電光火柱キックね、確かにこれは最後の技だけどこれは最初から有つたからあの子も知ってるはずよ。」

そこのモニターには、RIDER DENKOU HIBASHI RAKICKと書かれていたが補足をするように永林は続けた

「この技は全エネルギーを使つまるで死ぬだけの技の様に」

「多分彼は最後の戦いに使うはず。」

「まあ可能性でしょ?」

第九話「再戦、合成怪人VS新ライダー」（後書き）

スーパーヒーロータイム！！

早苗「ねえねえライダー電光火柱キックってどんなの？」

一刀「とりあえず利き足が炎上しながら電気を纏つてきりもみキックを放つ技」

早苗「そこに弾幕を加えると・・・弾幕ライダー電光火柱キックになるわけですね」

一刀「名前、長すぎる！」

次回をお楽しみに

第十話『平和?の日常と弾幕!-?』

守矢神社から少し離れた人里に買い物に出かけた早苗を見送つた一
刀は、

そのまま、身体を動かしていた。

新しい身体になれるために、要は身体ならしだ、人工筋肉や体の各
パーツの動きを確認していると、空から何かかが近付いてきたので
そちらに注意がそれた。

「ん? あれは? · · · 」

「あんたね仮面ライダーは!」

「え? ああ、そうだけど、何かよつ?」

「とりあえず着いてきなさい」

「ちょ、首しまつて、俺飛んでる!-?」

いとも簡単に女の子に誘拐?される一刀である。この光景は少々シ
ユール。

だって、男が首根っこ持たれて連れていかれつてんだから、しかも
空でね

ちなみにこのやり方だと獲物は死にます!」注意ください

「苦しかった···あんたはショックカーより怖いと解つた」

と首をさするが結構まだ痛みが残つてゐる。その様子を見て相手は

「へえ痛みは感じるんだ」

「つたりめーだこのバカ巫女が！ さなちゃんの方が人気があるわけだよ」

「やううひてのか!?」

「一. ここにまぎれ込んだりせんせー！」

一表でろ！！

つまらない事で喧嘩を始めた一人は、外で戦いを始めた

一
變身！

へえ、弾幕相手はやつはり変身するしかないんだよ

一 5・5の戦いかしたいからな

一 確かにね・・・はつ！」

— そんなん効くか! —

と弾幕を腕で弾き地面に叩きつけ、その後一気に距離を詰め、相手の札が入つてゐる箱をつかみ地面に滑らせるように投げて相手の後方に回り込み頭を押さえてそのまま腕をつかもうとしたが別の攻撃を

喰らつた

「「「」」、鳩尾は・・・」

「よつしゃー決まつたぜ」

「つて魔理沙ちゃんかよ、いいぜ乱入クエストは大好きだぜ」

「「「」」のは眞でやらねーとなー」

「なら私もですよー」

「さなちゃんー!?」

「行くよかずくん!」

「任せろー」

こうして爆発が、5つ大爆発が3つ起つた戦いとなりその後は皆で大の字になつて倒れていた。

「・・・・なんで怪人に勝てないのかが不思議だ」

「「「そりやあ女の子だし」」

「ですよねー・・・・でも何時もこんなことやつてんのか?」

「ええ、大体ね・・・・」

「「」」の遊び・・・・氣に行つたよ

「ありがとう……」

「お前も弾幕打てたらここにこな

「確かに機動そらすだけじゃなく、一緒になつて撃ちだしたいからな」

「お前変わり者つていわれねーか?」

「言われた事何度もあるよ……」

「こいつと早苗の方を一回見る。

「何ですか私の方を見てー!」

「いやなんでも……」

「まつたくあんたたちは」

「まあ、そろそろ体力も回復したし帰らつなんさなちやん」

「わつですね、もう遅くなつちやこました。では失礼します

と早苗と一刀が見えなくなつた途端に2人は

「なあ早苗のやつ、一刀の前だと敬語じやないんだな

「あつやつぱつと思つた?だよねー」

と軽い会話が飛び交っていた。

一刀達はとこづと

「なんかこじつこじつのが毎日有るのつていいよな～」

「でも大変だよ～」

「まあ・・・それが楽しい時間であり幸せなんだろうな。」

「そうだね。」

「だから、俺は幻想郷を守る、必ずな^ル」

と自分の決意を隣にいる護るものに向かって言い、そのまま空を眺めた
夕焼けに染まる空は、幻想的な美しさを感じていたが、いつかは光
は闇に包まれる。

首領が、ここ最近前線およびショッカーの活動が無かつたのはショ
ッカー戦闘員すべてを吸収し、自分の体が何者か解らない化け物と
なり、まるで悪魔のような姿となつて基地を破壊し最後の戦いに向
けて移動を開始した。

そんなことも知らない一刀は、自分のスペルカードを製作し使いこ
なそうとしていた。使いこなせれば、もう逃げ回る必要は無くなり
戦えるようになると思ったが靈力が他者に比べ、7割しかないらし
い・・・まああれだ、頑張れ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5414x/>

仮面ライダー 幻想郷～原点の風が幻想入り

2011年11月30日13時45分発行